

幻の金メダル

三中31回 内 藤 薫 男

一九四八年ロンドンオリンピック、第二次世界大戦直後に開催されたこの大会には、日・独・伊の枢軸三ヶ国は参加を許されなかった。もし日本が参加して居れば当然金メダルに輝いたであろう選手が居た。恐らく皆さんは「フジヤマのトビウオ」古橋広之進選手のことと思ひ出されると思う。彼の活躍は敗戦に打ち拉がれた国民を如何に力づけた事か。しかし彼は金メダルを手にする事はなかった。

水泳日本の華やかさの影にかくれてあまり話題にも上らなかったが、彼と同じ運命を辿った名選手がもう一人いた。その名選手こそ我らの同窓の長谷川敬三君である。ロンドンオリンピックの三段跳び決勝と日を同じくして行なわれた日本選手権陸上競技大会において、彼はオリンピックの優勝記録を上廻る記録を出していたのだ。オリンピックの優勝記録は一五・四四メ

ートル、彼の記録は一五・六メートル、戦後世界最高記録だった。当然金メダルに相当する大記録であり、巖田幹雄、南部忠平、田島直人の三選手につづき、三段跳びの四連覇が達成されていた筈だった。

長谷川敬三君が小学校六年生のとき、朝日新聞社が選んだ学力・体力とも優秀な日本一の健康優良児に指名されたことはご存じのことと思う。京三中入学以来陸上競技部に籍を置き、陸上競技に理解の深い國府田先生や、短距離の名ランナー岩崎重雄先輩（第二八回卒、名古屋商から慶応大学に進み、一〇〇メートルの日本選手権優勝者）らに恵まれ、順調に記録を伸ばし、彼の行く処敵なしの感があった。彼の脳裏には輝かしい跳躍日本の三段跳の伝統を継ぐのは自分しかない、オリンピックの大会の大競技場のメインポールに翻る日章旗を夢に描いていたと思われる。

しかし彼の行く手は決して順調ではなかった。狭い運動場は野球部やラグビー部に占領されて居り、練習も隣の臨済学院（現花園大学）の運動場を借りる有様だった。その上、三年生の時、校内運動会の走幅跳では六メートル五十、当時の中学三年生としては驚異的な記録を出したものの、踵を骨折するという大ハプニングに見舞われてしまう。運動場中央に設けられた臨時の砂場は、彼にとっては小さすぎ、砂場の向かい側の縁に着地し

てしまったからだ。彼の不運はさらに続く。拡大するばかりの日中戦争は、昭和十五年、皇紀二千六百年記念として開催が予定されていた東京オリンピックを、非常時を理由に返上に追いやってしまった。これはもう一人の同志の水泳長距離の名選手でオリンピック候補にあげられていた阿座上新吾君の夢をも奪ってしまった。東京オリンピックに照準を合わせて練習を積んでいた彼の無念さは砂防協会編の阿座上新吾追悼文集の中に切々と述べられている。

踵の傷も完治し、彼の活躍は復活するが、彼を取り巻く環境は悪化するばかりで、記録も予想された程伸びない。三中を卒業すると彼は憧れの早稲田大学に進学する。しかし早稲田時代の彼は一つの壁にぶつかっていたのでは無かろうか。当時の第一流の目安である十五メートルは超えられなかった。

戦時中の彼の消息は知らない。しかしやがて朝日新聞スポーツ欄に彼の健筆が振るわれることになる。それと共に競技生活も復活する。オリンピックも再開されたが日本の出場はゆるされていない。彼は無念と悔しさを日本陸上選手権大会の三段跳にぶつけた。そして遂にやった。オリンピックの優勝記録を破ったのだ。しかし金メダルは幻でしかない。彼の臉には遙かにロンドンの空に翻る日章旗が浮かんでいたことだろう。「食料不足の中にあつても、通勤途中の満員電車の中で爪先立ちや

屈伸運動でトレーニングを怠らなかつた。」と記されていた新聞記事を思い出す。次のヘルシンキ大会（一九五二年）では既に彼の全盛時代は終わっていた。代表選手には選ばれたものの予選通過すら出来なかつた。

新聞記者も終え、競技生活から引退してからも彼は京都大学農学部運動場に通いつづけ京都大学の陸上競技部のコーチとして次代の競技者育成に携わった。一九九九年五月六日陸上競技一筋に捧げた生涯をしめくくった。



山城 信子